

2012年5月20日 ライブ vol.5

le(大崎)にて、平野敏久・坂本拓也・池田拓実・堀真理子の4氏からなるライブがあった。事前に於いてライブに関しての情報が皆無に等しく、出演者各氏がどう意識していたかはともかく、出演者を知る各個人が「こういう類の事をしそうだ」という予想に1,500円+1ドリンク+運賃を賭けて出かける、もしくは、戸越銀座をぶらっと流してて看板を見付け、興味をそそられて入る、そういうイベントだと受け取る。出演者各氏がどう意識していたのかは後に知るところとなるが、ともかく私に関して言えば池田氏を知る程度で、知っていたところで毎回何をするのか読めず予想が立たないし、仮に看板を見て入ろうとした場合、看板から得られる情報量は微塵にも増えず、興味を喚起するための材料がない。

つまり、宣伝からエクストリームなイベントである。その点で興味を掻き立てられる。

4人それぞれのパフォーマンスエリアは固定されていて、正面真ん中、出演者中最大の面積を占めるのが坂本氏で、物が配置されている。置かれている物は何の変哲もない細長い棒やボード、ウレタン(?)のブロックなどだが、その配置が平安京の再現模型と言うか、ナスカの地上絵と言うか、古代文明の遺跡に見られる共通項のような配置。書いてて思ったが、私にとってはゲームのゼビウスのイメージが最も近い。その配置に向けてプロジェクターが設置されている。

客席から見てステージの左端に池田氏が陣取り、マイクスタンドにWEBカメラを固定してテーブルを天頂から撮影し、氏の後方(客席から見て左の壁)にプロジェクターで投影する準備が整えられている。

ステージの右端には堀さんがマイクスタンドの一方の端に風鈴を付けて、着席している。

そして客席の後方、会場入り口のすぐ横に平野氏。客席は全て入り口を背にして同じ向きに置かれているので、開演すると振り向かなければ何をしているのか分からない。

以上が初期状態。これがもし客席がなくスタンディングであれば、ひとつのライブと言うよりも別個のブースとして見られる可能性が高い。

開演。60分のワンセット。前半に小さい音量でシンセサイザーの音で和音が時折鳴らされ、それに合わせてかどうなのか別のシンセサイザーからオルガンの音色と共に遺跡のような配置へプロジェクターから細い光が走り、ウレタンのトンネルを抜けて透明な花瓶に達する。その右側ではテーブルの上で色とりどりの物があちこちへと動かされると、壁には形と時間が断片化した映像と、たまにベジェ曲線が映し出される。そして2度ほどハッカの香りがする液体を噴霧。反対側ではお皿にホタルイカの一晩干しが放射状に並べられ、ささやくように英語のテキストが読み上げられる。ホタルイカは後に一枚ずつラップに包まれていった。後半はシンセサイザーの音が消え、その代わりに後方からごそごそと何か作業をしている音が聞こえてくる。

パフォーマンスについてもっと細かく書きたくもあるが、それはかえって誤解を与えそうな気がする。というのも、上記の音や映像のタイミングに同期性が見られず、書き過ぎると順序がないものが順序立って見えてしまい正確性を損ねてしまいそうなのだ。全体を見ると無秩序である。しかし、混沌ではない。平野・坂本・堀の3氏はどちらかと言えば静謐な雰囲気ですべて統一されており、池田氏だけは狭いエリアで色・動き・しまいには香りも場に供給するなど、際立って饒舌。調和を以って感動の落としどころを提供するのではなく、各々がこれと決めたパフォーマンスを60分の中でごちゃ混ぜに体験させて、「どや！」と突き付けてくる。

面白かった。いくつか感動を覚えたところがある。しかし、この後にお話をうかがったところ、私が感動を覚えた点について、そうした感動を呼び起こしたのは失敗という節があるようだ。今回のゲストである堀さんを含めた出演者全員のコンセンサスなのか今ひとつ確信を得られなかったが、音が意味を成さない音楽作品を試みているとのこと。無音という意味ではなく、箱の中から物を取り出すゴソゴソ音であるとか、これも後で知ったことだが、平野氏は後半30分はランプの一人遊びをしていたそうで、そのガサガサ音だとか、普通であれば細心の注意を払って物音を出さないよう気を付けるところを全く気にせず、客がうっかり携帯電話の着信音を鳴らしてしまおうが、作品に対して何ら影響を与えないと言っているに等しい。しかし、私は今回鳴らされた音楽的な音にも魅力を感じたのである。

今回については平野氏と坂本氏がシンセサイザーの音を用いており、私にはそれが大きな拠り所となった。特に坂本氏による遺跡のような配置へプロジェクターから一筋の光が放たれると同時に薄くオルガンの音が鳴らされる場所、更に言えば前半30分は偶然平野氏のシンセサイザーがユニゾンで重なって、その神秘性は凄まじいものがあった。それがもし今後、コンセプトに忠実に無音になるとしたら、その感動のほとんどがスпойルされてしまう。それは堀さんの風鈴とウイスキーにも言える。それに、一種のコンテンポラリーダンスや演劇と見分けがつくだろうか。その答えを、あくまでも音を排した池田氏に求めてみるのだが、「音を排した音楽」という目的に則した「音楽的な状態遷移」で映像を加工したりメントールを噴霧するのは、美術的な回答なのか、間がもたないと考えたか、サービス精神か、その辺りが判断つかず危うい感じがする。しかし恐らく、そういう事を判断させない事こそが狙いのだろう。

そして最初的话题に戻る。1,500円＋1ドリンク＋運賃を賭けて私はI-eのドアをくぐった。その場にいた時間もそうだが、今まさにこれを書き上げようとしている時間に於いてもあれこれと思いを馳せる材料に事欠かず、賭けに勝ったと言って良さそうだ。次回、今回と同じことをやるのであれば友人知人に勧めやすいが、まず間違いなく、このメンバーは毎回外してくる。おかげでこうやって安心してネットバブルを書けるというものだし、これを足がかりにして「何をするのかわからない不安」から「何をするのかわからない楽しみ」になれば幸いである。拝具。